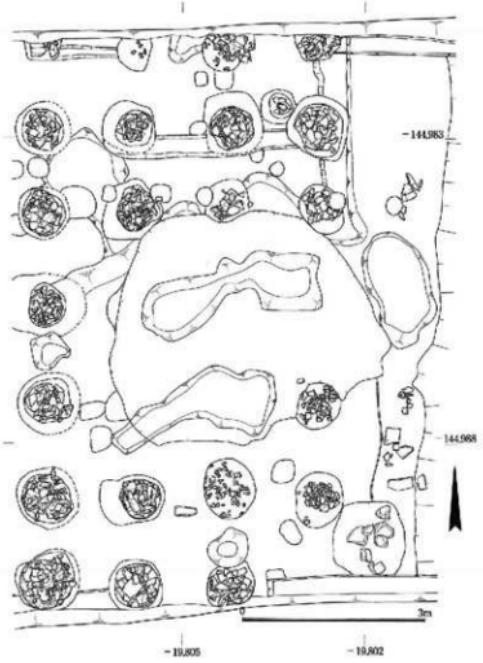


第15次調査 造構平面図 1/150

世紀後半頃の上器が、更には第Ⅲ期埋土の上層（茶褐色上）には12~13世紀以降の遺物が含まれ、各々堆積時期を知る上で手がかりとなる。造構の位置関係から、SD01との関連が考えられ、雨落ち溝と推測される。

SX03は、発掘区のほぼ中央で検出した埋甕造構群。

発掘区内で計28基分を検出した。層位的には、造成土直下の淡茶褐色粘質土の上面から掘り込まれている。この淡茶褐色粘質土の堆積は、主にSX03とその西側付近を中心とした部分にみられ、中には瓦片等の遺物が含まれており、整地土または埋甕造構の基礎の盛土であ



埋壺遺構 SX03 平面図 1/40

る可能性もある。その堆積範囲の西限は、後述の S X 04 の東側付近にまで及んでいる。

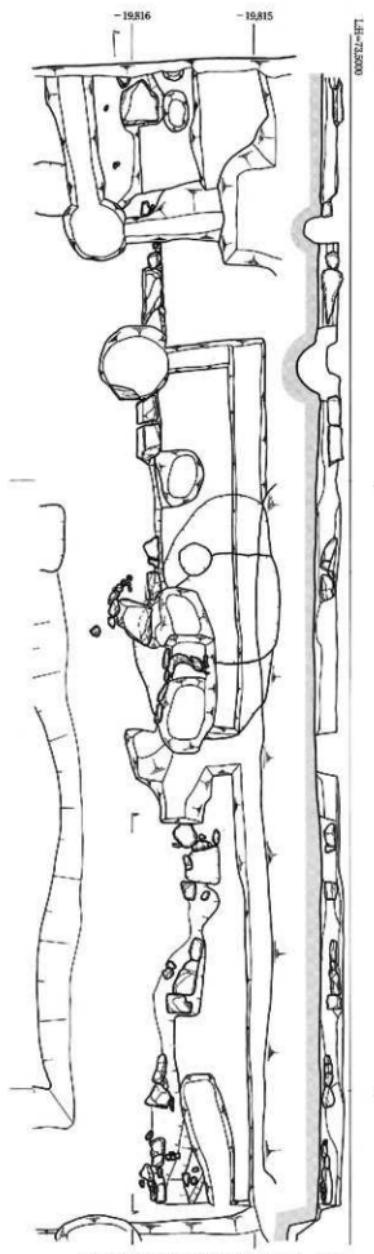
各埋壺は、掘形の中心間の距離が5小尺(約1.5m)となるよう配置されており、東西方向に4基ずつ、南北方向は少なくとも13列分以上が存在していたものと推定される。さらに発掘区外の北と南側へと続く可能性がある。各埋壺遺構の大半は掘形を確認しており、掘形の平面形は円形か梢円形で、径は1.1~1.5mと少しばらつきがある。壺が残存している場合は壺の胴部径から0.2~0.4m程度広い掘形であることが多い。壺の底は、必ずしも掘形の底部に接しているとは限らない。残存していた壺の胴部径も微妙に異なるので、壺を据えるにあたってはその器高や胴部径等を考慮し、埋壺の据える高さを調整していたと推測される。壺内の様相に着目して分類すると、須恵器壺底部が残存している例と、そうでない例とに分かれる。さらに、壺底部が残存している場合は、大量の丸瓦・平瓦や軒瓦が、壺の破片や土師器とともに含まれている例と、瓦類がほとんどなく壺や土師器が大半を占める例とに分かれる。この後者の例の中には、土師器が伏せて置かれたとみられる壺もあった。

また、壺底部が残っていない例でも、埋土中に壺や瓦の破片を多く含まれている例と、遺物自体がほとんど含まれていない例とがある。ただし、各例ごとの遺構分布の状況については、特に顕著な傾向は認められない。埋壺遺構内に残存していたり破片で出土する須恵器は大抵は大型の壺の一部であり、胴部径は概ね1m程度に復原できる。また出土した軒瓦には、西大寺創建瓦の6732型式に似るが中心飾りが異なる紋様の新型式軒平瓦がある。掘形より出土した遺物の大半は須恵器壺の破片であったが、9世紀の土師器小片が出土した掘形が1基ある。埋壺遺構群が廃絶した時期は、須恵器壺や軒瓦等とともに出土した土師器の年代から、10世紀中~後半頃と推測される。

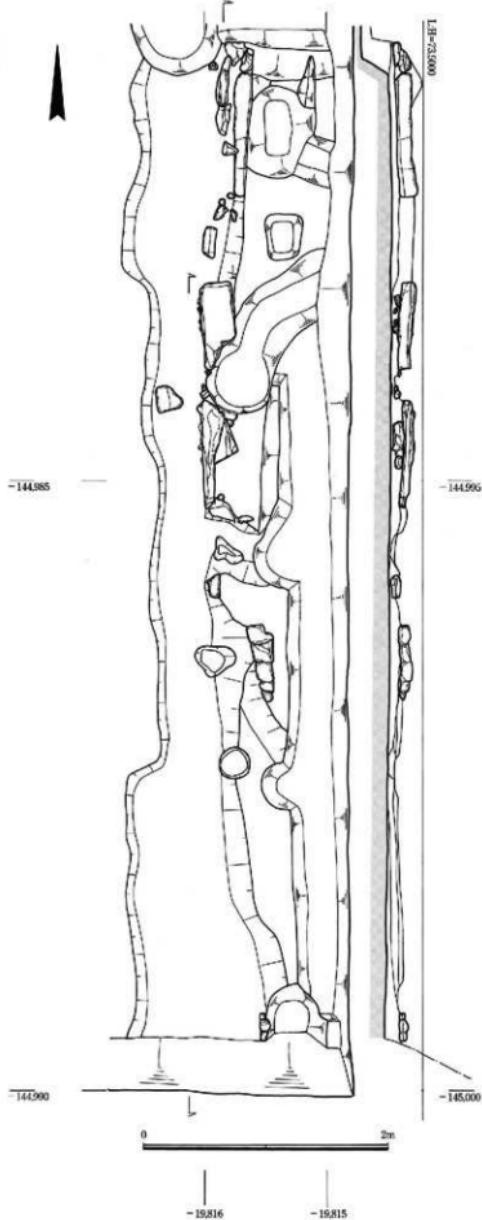
S X04は、発掘区の中央から東寄りの場所で検出した南北方向の凝灰岩列で、断続的に凝灰岩が列をなして残存していた。凝灰岩の多くは、崩落して原位置から移動していたり、あるいは表面の劣化が進むなどしていた。その中の比較的残存状況の良い凝灰岩には、石を加工した痕跡がみられた。石の大きさは10~140cmと一様ではなく、置き方についても様々である。板状に加工した石の幅の広い面が縦になるよう置いている場合もあれば、逆に幅の広い面が横になるように置いている場合も見受けられ、石の積み方には規則性は見えない。この点については、何らかの工法的な意図を反映している可能性もあるが、一方では転用石材を利用していたことに起因した様相の可能性もある。

さらに、これらの凝灰岩列は、波状褐色粘土層上に堆積する暗茶灰色土(マンガンが表面に沈着する)層上にある。この暗茶灰色土は、多くの凝灰岩の直下あるいは東側に分布しており、裏込土とみられる。この層内に含まれる土師器は、型式からみて概ね10世紀前半頃のものであり、この時期を凝灰岩列が築造された年代に関する手がかりとして見なすことができる。

これらの凝灰岩列は必ずしも直線上に整列していない。すなわち、発掘区の北端から中央付近にかけては、各石の西端面はほぼ直線上に施工されているが、発掘区中央やや南よりの場所(国土座標値X= -144.989~-144.990の間)に、明らかに板状の石を東西方向に置いたと確認できる箇所があり、そこを境に、石の西端面のラインはやや西側へ寄った傾向にある。更に、南側に拡張した発掘区部分の中央北寄りの場所には大きな板状の凝灰岩が据えられており(国土座標値X= -144.993~-144.995付近)、一部は後世の擾乱により破壊されている



凝灰岩列 SX04 北半部立面·平面图 1/40



凝灰岩列 SX04 南半部立面·平面图 1/40

が、ほぼ原位置を保っている様相が見受けられる。この部分ではさらに西側へと石の西端面のラインが張り出している。そしてその南側で再度東側に寄っている形跡が看取され、発掘区外へと延びる状況にある。これらの凝灰岩列の積石工法については、残存状況が良くないため詳細は不明ではあるが、奈良時代の大規模寺院の主要堂宇によくみられる壇正（上）積等の工法ではないと考えられる。

S X05は、凝灰岩列 S X04の西側で検出した平面不整形の性格不明の窪み状の遺構。深さは0.1～0.3mで、S X04の西側に帯状に拡がる様相を呈するが、部分的には西側へ拡がり発掘区外へと延びる部分もあり、全体としては不整形である。埋土は凝灰岩列 S X04の西側の面や崩落した凝灰岩片を埋めるような状況であり、埋土から奈良時代から平安時代にかけての丸瓦・平瓦や上器のほか、前述の6732型式に似るが中心筋りの異なる新形式軒平瓦や、奈良三彩、灰釉陶器等が出土した。土器の年代から、10世紀後半頃に埋まるとみられ、前述のS X04の廃絶の時期を示す重要な手掛かりである。

S X06は、前述のS D01とD02の間で検出した東西方向の溝状の遺構。北・西・東側は搅乱により破壊されていたが、東西約1.2m、南北約0.5m分を検出した。深さは0.1m～0.2m程度で、中央部分が浅く、西側と東側は比較的深くなる傾向にある。内部には丸瓦を東西方向に凹面を上にして置いている。雨落ち溝とみられる前掲S D02の第Ⅲ期に東側に形成された積土と考えられる茶褐色土層直上より掘り込まれている。S X06は、位置的にはS D02とかつての条坊側溝であるS D01の間にあって、両者を繋ぐような形状を呈し、第Ⅲ期の時期においてS D02に溜まった水をS D01へと排出するための施設であった可能性が高い。通常、条坊側溝と雨落ち溝の間には、築地の存在が想定されるが、今回の調査では、築地の存在を明確に示す遺構は確認されていない。また、S D01の東肩とS D02の西肩の間隔は、検出した遺構の状況をみると最大でも約2m弱しかなく、京内寺院の築地を想定するにはいささか狭いと思われる。よって、築地ではなく板塀など他の構造の閉塞施設であった可能性もあるが、S X06はこうした何らかの閉塞施設と並存して、排水の機能を果たしていたと考えられる。

なお、S X06の最深部の標高が約73.5mであるのに対し、S D02第Ⅲ期の溝底部の標高は約73.1m程度であるので、S X06の底部の方がやや高くなっているものの、排水機能は充分に果たせていたことは想定できる。以上の点からみて、S X06は暗渠と考えられる。

S A07～12は、発掘区の中央付近で検出した掘立柱穴列である。このうち、S A07～10については、いずれも

埋立遺構群 S X03の西側で検出した。S A07はS X03よりも古く、またS A09はS A08よりも新しいことが、遺構の重複関係から確認できる。ただし、建物として組み合う柱穴は見当たらない。これらの多くは埋立が設置される以前の時期の遺構とみられる。また、遺構の重複関係から、S A11はS X03よりも新しい。さらに、S A12は礎石据え付け穴の痕跡であり、建物になる可能性が高い。東側の穴は、雨落ち溝とみられるS D02の第Ⅱ期の埋土が堆積した上から掘り込まれている。上層の第Ⅲ期埋土に含まれる土器の年代などからみて、S A12は平安時代以降の時期の遺構と推測される。位置的には築地想定地にも近いことから、門などの施設が想定されよう。このほか、S X03の下層や西側部分を中心に複数の柱穴を検出した。これらは埋立遺構以前の遺構の可能性もあるが、削平などもあり明確に建物跡としてはまとまらない。

S K13は、発掘区のほぼ中央で検出した土坑。東西約4.5m、南北約4mの平面不整形を呈し、遺構の重複関係からみて前述のS X01よりも新しい。未完掘のため深さは不明であるが、埋土中からは14世紀前半頃の土器片が出土し、埋没時期を知る重要な手掛かりである。

M. 出土遺物

今回の調査で出土した遺物は、遺物整理箱約184箱分である。その大半は奈良時代から平安時代にかけての土器・瓦が占める。土器・土製品類は、奈良～平安時代十輪器・須恵器・黒色土器（A・B類）、灰釉陶器・縁輪陶器・奈良三彩、製塙土器・鎌倉時代瓦器、室町時代土器器、中国産陶器（唐三彩陶枕）がある。瓦・埠頭類は、奈良～平安時代の丸瓦・平瓦・軒丸瓦・軒平瓦・道具瓦（熨斗）・埠がある。詳細は今後機会を見て別稿にて報告したい。

V. まとめ

今回の調査で確認した埋立遺構群 S X03と、ほぼ同じ10世紀中～後半頃にかけての時期に廃絶したとみられる凝灰岩列 S X04の両者は、ともに並存していた可能性が高い。ただし、両者が関連性のある遺構であったかどうかを知るための直接の手がかりは、搅乱や削平などもあって、今回の調査では得られてはいない。

しかしながら、双方の遺構の位置関係をみると、ともに南北方向に並行する状況にあり、さらには両端が発掘区外へと延びていく点では様相は一致しており、注目される。このほか廃絶の時期がほぼ同じとみられることや、S X03直下の堆積である淡茶褐色粘質土が西側に拡がり、S X04の東側付近にまで及んでいる状況等を考慮すると、両者は一体の遺構である可能性はかなり高いとみられる。すなわち、淡茶褐色粘質土はS X03の埋立群の設置に伴い、周辺を整地あるいは基壇状に盛上した

際に形成された層と考えられ、その西側面の法面保護の石積みの施工として、SX04の凝灰岩列が比定できよう。

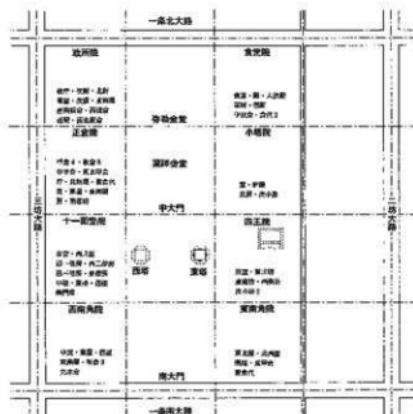
ただ、埋甕遺構群の一部に残存していた須恵器甕の底は、遺構を検出した面より0.4m程度下であり、仮にこ

これらの甃が脇部中腹付近まで埋められて、当時の床面が形成されていたと仮定するならば、当時の床面は造構を検出した面の上方0.2~0.3m付近と推測できる。このような想定をすると、柱穴や瓦葺建物等によくみられるような礎石据え付け穴の造構は削平されずに残存しているであろうから、本来存在していたのであれば、今回の調査において検出されている筈である。一方、甃の頭部まで埋めて床面を形成していたと仮定するのであれば、当時の床面は造構検出面の上0.6~0.7m付近と想定され、場合によっては削平等によって柱穴はもちろん、小規模な礎石据え付け穴などでも、その痕跡が失われている可能性もある。ただし、それだけの高さの床面を構築しようととした場合、その外周は土留めのために相応の法面施工等をする必要が生じるとみられる。しかし、今回検出した凝灰岩列S X04は、残存状況が良くないために詳細な構造は不明であるものの、壇正（上）積基壇のような施工ではないであろう。以上のような想定を総合すると、どうやら調査地の中で埋甃群S X03を覆う大規模な掘立柱建物や礎石立建物のような施設は存在していなかった可能性が高いのではないかと思われる。

ところが、現在までに平城宮、京跡や他の都城遺跡で多く検出されている埋甕造構の類例をみると、そのほとんどは比較的耐久性のある建築物と一体の構造であり、しかもその多くが造酒に関係する施設として想定されている。また一方では、現代の事例ながらも、伝統的に露天に甕を置いて食物を保管・貯蔵している例がいくつか知られているので、埋甕施設の構造と貯蔵物の関係等の問題は、今後さらに検討していく必要があろう。

なお、「西大寺資財流記帳」やその他西大寺に伝わる絵図等によると、調査地付近は西大寺の食堂等の施設が想定されている。その「西大寺資財流記帳」は同時に各施設の規模や屋根の形態についても伝えており、「倉」の存在などが見える。今回確認した埋甃遺構群の規模（南北幅で約19m）に見合う規模の建物もいくつかあるものの、「倉」という名の付く施設の記載には、見合う規模の施設はない。倉以外で、位置的・規模的に同等な施設としては、東檜皮厨（長11丈・廣2丈）があるが、SX-03の検出位置が条坊傾溝に程近い、築地が想定される場所のすぐ西側である点を考慮すると、少々疑問がある。

また、「西大寺資財流記帳」の成立が奈良時代末（宝亀十一年[781]紀年）であることに留意しておく必要がある。埋甕造構群 SX03が形成された詳細な時期は特定できないが、少なくとも1基の掘形からは9世紀頃の土師器小片が出土している。もちろんこれはたまたま当該の甕が破損等をしたなどの事由で取り替えられたものと想定される。



西大寺主要伽藍地区の配置復原図（奈文研・奈良県教委 1990 より）

れた際の遺物である可能性も排除できない。しかしその一方で、前項において考察したように、仮に西側の凝灰岩列 SX04 と一体の造構であったなら、10世紀の前半頃に形成され、10世紀中～後半頃には廃絶したということになって、「西大寺資財流記帳」よりも後世の造構である可能性が生じてくるであろう。

埋甕造構群 SX03 は、検出造構の状況やその位置、そして時期的な問題等、「西大寺資財流記帳」にある施設に直接比定をすることは困難ではないかとみられる。ただし、「西大寺資財流記帳」に見える食堂院の諸施設のいずれかの後継施設の造構である可能性はあるかもしれない。

このほか、発掘区の東側で検出した南北方向の溝 SD 01 は、位置的には西三坊坊間東小路の西側溝として考えられる。ただし、埋土中から 15 世紀の遺物が出土した点には留意する必要がある。平城京内の条坊造構に関し

ては、奈良時代以降も水路として機能していたものが多いとみられ、実際にこれまでの平城京内の調査でも埋土中に鎌倉時代以降の遺物を包含する事例がいくつか確認されている。この SD01についても、そうした事例の一つとして見なすことができ、平城京廃絶以降もかなり長い期間にわたって機能し続けていたことが想定される。この背景には、西大寺旧境内の中でも、SD01 が主要伽藍地区の東辺に位置していて、造営以来ずっと境内地の東辺を区画する施設としての役割を果たし続けていた可能性が指摘できる。かかる事実は、中世以降の西大寺と秋篠寺との境界争いや、西大寺の土地利用の問題を考える上では、ひとつの重要な手掛かりともなるだろう。

(武田和哉)

〔主要参考文献〕
〔著〕大河今丈・北川耕穂研究会「平城京石室北道」2005
奈良県立文化史研究室・奈良県教育委員会・「西大寺跡古墳群工事・発掘調査報告書」西大寺 1990
監修者「西大寺古跡園のまつり」奈良市学術委員会 2004
監修者「西大寺跡古墳群・井戸周辺の歴史」奈良市学術委員会 2005



凝灰岩列 SX04（南から）



埋甕造構 SX03（南から）



発掘区東側部分（北から）



発掘区南側部分・埋甕造構 SX03（南から）

23. 平城京跡（一条北大路）西隆寺跡の調査 第7次

調査次数	S R 第7次	調査期間	平成16年2月9日～3月19日
事業名	西大寺近隣公園整備事業	調査面積	230m ²
通知者名	奈良市長	調査担当者	山前智敬
調査地	奈良市西大寺東町一丁目70-4他		



第7次調査 発掘区位置図 1/6000

調査地は、平城京の条坊復原では一条北大路の路面が想定されている。しかし、平成15年度に元興寺文化財研究所が本調査地の西側で実施した調査¹⁾では、一条北大路の両側溝を検出しており、大路は条坊復原図の想定位置より北側に位置することが新たに判明した。この調査では、一条北大路の他に西二坊大路とその両側溝、古墳時代や奈良時代～鎌倉時代の掘立柱建物や井戸・土坑・溝を検出している。したがって、今回の調査では、古墳時代～鎌倉時代の遺構の有無、西隆寺跡（右京一条二坊十六坪）の北端の様相確認を目的とした。

発掘区内の基本的な層序は、上から造成土、淡黄灰色粘質土、暗灰茶色砂質土、茶褐色粘質土または茶灰色砂質土（遺物包含層）と続き、地表下約1.1mで暗褐色粘土または黄灰色粘質土の地山に至る。地山の標高は概ね72.4mである。遺構はすべて地山上面で検出した。

検出した遺構には奈良時代～鎌倉時代の遺構がある。以下で概要を述べる。

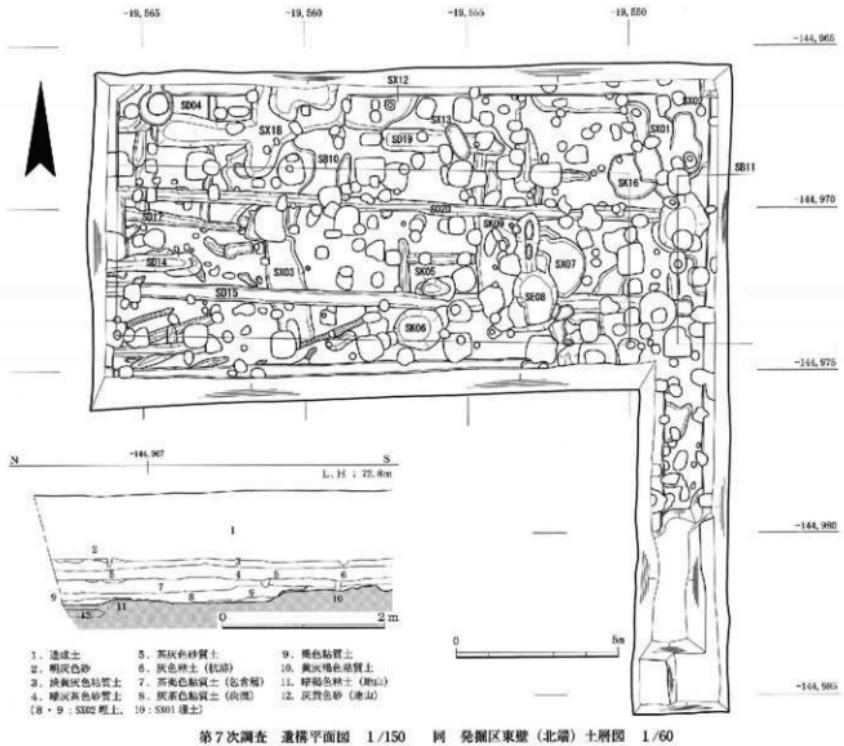
奈良時代の遺構 土坑S X01～03・07、S K05・06、溝S D04がある。S X01は東西2.7m以上、南北6.5m以上、深さ0.1m。埋土から古墳時代の土師器、8世紀の須恵器、丸・平瓦が出土した。重複関係からS X02、S B11、S K16よりも古い。S X02は東西1.5m以上、南北2.5m以上、深さ0.2m。埋土から8世紀後半の土師器、奈良時代の丸・平瓦、製塙土器が出土した。重複関係からS X01よりも新しい。S X03は東西約1.0m、南北



発掘区全景 北東から

4.2m以上、深さ約0.1m。重複関係からS B10、S D15よりも古い。S D04は幅約0.3m、深さ約0.1m。長さ4.7m分を確認した。重複関係からS D17・20、S X18よりも古い。S K05は東西約1.0m、南北約0.8m、深さ約0.5m。重複関係からS D15よりも古い。S K06は東西約1.4m、南北約1.2m、深さ約0.6m。重複関係からS D15よりも古い。S X07は東西1.4m以上、南北2.0m以上、深さ約1.1m。重複関係からS E08、S K09、S D15よりも古い。S X03・07、S K05・06、S D04からは、8世紀以降の土師器・須恵器が出土した。

平安時代の遺構 井戸S E08、土坑S X12・13・16・18、S K09、溝S D14・15・17・19・20、掘立柱建物S B10・11がある。S E08は東西約1.3m、南北約1.7m、深さ約1.0m。枠材は抜き取られている。埋土から8世紀の須恵器、8世紀末～9世紀初めの土師器・須恵器、奈良時代の丸・平瓦、製塙土器、時期不明の砥石、石器が出土した。重複関係からS X07よりも新しく、S K09、S D15よりも古い。S K09は東西約0.7m、南北約2.0m、深さ約0.8m。重複関係からS X07、S E08よりも新しく、S D20よりも古く、S B10は桁行6間(16.2m)、梁間2間(5.4m)の東西棟建物。重複関係からS D14、S K16、S X18よりも古く、S X04よりも新しい。S B11はS B10と柱筋が揃う桁行1間以上、梁間2間(5.4m)の東西棟建物と思われる。柱穴埋土から9世紀の須恵器・土師器が出土した。S X12は東西1.5m以上、



第7次調査 遺構平面図 1/150 同 発掘区東壁(北端) 土層図 1/60

南北1.1m以上、深さ約0.1m。重複関係からS X18よりも古い。S X13は東西約0.5m、南北約1.0m、深さ約0.5m。重複関係からS D19よりも古い。S D14は幅約0.5m、深さ約0.2m。長さ29m分を確認した。S D15は幅約0.4m、深さ0.1～0.2m。長さ18m分を確認した。埋土から軒平瓦6691D、製塙土器、棒状鉄製品、鉄滓などが出土した。S X12・13、S D14・15から9世紀以降の土師器・須恵器が出土した。S K16は東西約1.4m、南北約1.2m、深さ約0.5m。埋土から9世紀の土師器・須恵器、10世紀の土師器などが出土した。S D17は幅約0.3m、深さ約0.5m。長さ3.6m分を確認した。埋土から古墳時代の土師器・須恵器、9世紀の土師器・須恵器、10世紀の土師器などが出土した。S X18は東西2.8～4.0m、南北3.3m以上、深さ0.05～0.3m。埋土から古墳時代の須恵器、8～9世紀の土師器・須恵器、10世紀後半～11世紀初めの土師器、砥石、輪の羽口が出土した。S D19は幅約0.7m、深さ約0.1m、長さ2.9m分を確認した。埋土から9世紀の土師器、11世紀の土師器が出土した。

鎌倉時代の遺構 溝S D20がある。S D20は幅約0.4m、深さ約0.1～0.2m。長さ19m分を確認した。埋土から古墳時代の土師器・須恵器、9世紀の土師器・須恵器、黒色土器A類、10世紀の土師器、12～13世紀の土師器、瓦器、時期不明の製塙土器、鉄滓が出土した。

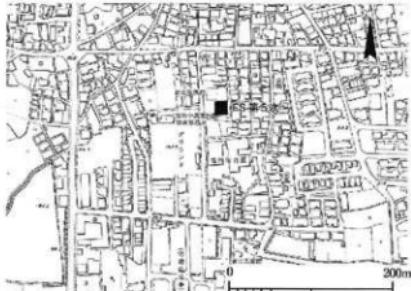
他に、建物としてはまとまらない時期不明の柱穴や小土坑を多数検出した。

今回の調査で、奈良時代から鎌倉時代にかけての遺構を検出したが、古墳時代の遺構は検出できなかった。しかし、古墳時代の遺物が少なからず出土していることから考えて、調査地周辺に遺構がある可能性が高いと考える。また、9世紀には、大型の東西棟建物が棟を揃えて2棟並んで建っており、「日本三代実録」の元慶4(880)年5月19日壬申条に、西隆寺を西大寺に攝領させるという記事があり、奈良時代後半に建立された西隆寺に伴う建物の可能性が高いと考える。
(山前智敬)

1) (財) 元興寺文化財研究所『平城京右京北邊』2005

24. 古市遺跡の調査 第5次

調査次数	F S 第5次	調査期間	平成15年5月6日～6月12日
事業名	古市人権文化センター建設事業	調査面積	302.75m ²
通知者名	奈良市長	調査担当者	久保清子
調査地	奈良市古市町1226		



第5次調査 発掘区位置図 1/6,000

I.はじめに

調査地は、高円山の西麓の岩井川によって形成された扇状地上に位置し、北側には岩井川が流れている。また、古墳時代から安土桃山時代にかけての複合遺跡である古市遺跡に該当し、周辺には、古市方形墳、古市狐塚古墳が点在している。古市遺跡では、これまでに市が4次の調査¹⁾を実施しており、古墳時代中・後期の竪穴建物、掘立柱建物、土坑、奈良～平安時代の掘立柱建物、安土桃山時代の井戸等を検出している。また、平成7年度に周辺一帯の踏査²⁾を実施しており、踏査地全域で弥生時代から近世にわたる幅広い時期の遺物が散布していることが判明している。

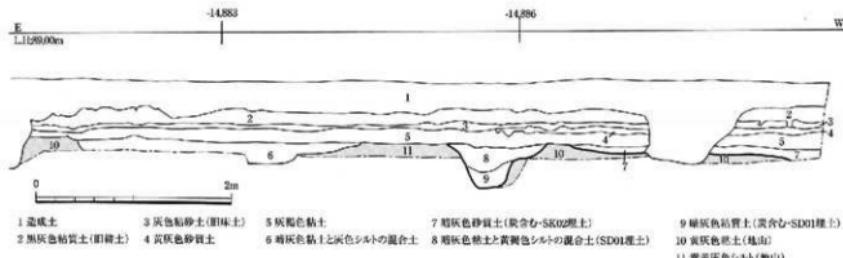
今回の調査は、以上の成果を踏まえた上で、古市遺跡



第5次調査 発掘区全景 (北西から)

の性格をより明らかにすることを目的として調査を実施した。

発掘区の層序は、東半は上から造成土(0.2～0.3m)、耕土(0.1m)、床土である灰色粘砂土(0.05m)と続き、地表下0.5mで黄灰色粘土または灰褐色縞の地山に達する。南西部及び北西部では床土の下に黄灰色砂質土(0.05m)と奈良時代の整地土である灰褐色粘土(0.1～0.2m)が堆積しており、地表下0.7～0.8mで黄灰色粘土または青黃灰色シルトの地山に至る。地山上面の標高は発掘区東端で88.0m、南西隅で87.8m、北西隅で87.7mである。遺構は奈良時代整地土上面もしくは地山上面で検出した。なお、旧建物部分及び排水管理設備所については、削平が著しいため、遺構は残存していなかった。

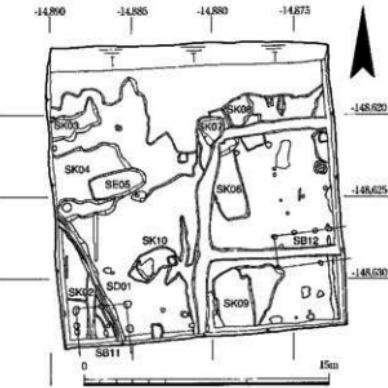


第5次調査 発掘区南壁土壌図 1/50

II. 検出遺構

古墳時代の遺構 溝1条、土坑6基、井戸1基がある。SD 01は幅0.5~0.7m、断面形がV字形で、検出面からの深さ0.5mの南東から北西方向へ流れる素掘りの溝である。埋土からは弥生時代後半から古墳時代初頭頃の土器が遺物整理箱1箱分とサヌカイト剝片3点が出土した。重複関係からSK 02・SB 11よりも古い。SK 02は東西2.4m以上、南北3.0m、検出面からの深さ0.1mの平面が不整円形の土坑である。埋土からは、古墳時代前~中期の上部器が少量出土した。重複関係からSB 11よりも古い。SK 03は東西3.0m以上、南北1.5m、検出面からの深さ0.15mの平面が不整形の土坑である。埋土からは、古墳時代前~中期頃の土器が少量出土した。SK 04は東西4.8m以上、南北4.2m、検出面からの深さ0.2mの平面が不整形の土坑である。埋土からの出土遺物はない。重複関係からSE 05よりも古く、SD 01よりも新しい。SE 05は東西3.4m、南北1.6m、検出面からの深さ0.4mの平面が不整長方形の井戸である。棹材は残存しておらず、抜き取られていると考えられるが、素掘りの井戸である可能性も考えられる。埋土からは、時期不明の上部器が少量出土した。重複関係からSK 04よりも新しい。SK 06は東西1.8m、南北2.7m、検出面からの深さ0.2mの平面が不整長方形の土坑である。埋土から時期不明の土器が少量出土した。重複関係からSK 07よりも古い。SK 07は東西2.6m、南北6.6m以上、検出面からの深さ0.2~0.3mの平面が不整長方形の土坑である。埋土から古墳時代前~中期頃の土器と時期不明の土器と須恵器が少量出土した。重複関係からSK 08よりも新しい。SK 08は東西2.0m、南北3.0m以上、検出面からの深さ0.1mの平面が不整長方形の土坑である。埋土から古墳時代前~中期頃の土器と時期不明の土器が少量出土した。SD 01~SK 02~04・SE 05は奈良時代の整地上下の地山上面で、SK 06~08は地山上面で検出した。

奈良時代の遺構 土坑2基、獨立柱建物2棟がある。SK 09は東西4.4m、南北4.0m以上、検出面からの深さ0.25mの平面が不整円形の土坑である。埋土からは、奈良時代のものと考えられる須恵器と時期不明の土器が少量出土した。SK 10は東西3.2m、南北1.6m以上、検出面からの深さ0.2mの平面が不整形の土坑で奈良時代整地上下面から掘り込まれている。炭化物を多く含む埋土からは、奈良時代の食器類を中心とする土器及び須恵器が合わせて遺物整理箱2箱分出土した。SB 11は東西2間(3.0m)、南北1間(1.5m)以上の獨立柱建物で、南側は発掘区外へと続く。奈良時代整地土下



遺構平面図 1/300

で検出した。重複関係からSD 01・SK 02よりも新しい。柱穴掘り埋土からは時期不明の土器が少量出土した。建物の主軸は、国土方眼方位北で西へ5°振れる。SB 12は東西3間(3.4m)以上、南北1間(1.9m)の東西棟の獨立柱建物で、地山上面で検出した。埋土からは時期不明の土器が少量出土した。建物の主軸は、国土方眼方位北で西へ7°振れる。

他に、奈良時代整地土上面で耕作に伴うと考えられる素掘り溝を多数確認した。埋土からは13世紀頃の瓦器や土器が出土している。

Ⅲ.まとめ

①今回の調査結果から、弥生時代後期から古墳時代初頭頃には既に墓地内で人々が生活していることがわかった。過去の調査では、包含層や地山上面で縄文時代や弥生時代の遺物が出土していることから、周辺にはさらに古い時期の遺構が存在している可能性が高い。

②調査地は古墳時代から奈良時代にかけては宅地の一部として利用されていたことが考えられる。平安時代については調査地の西側では建物が見つかっているが、今回は遺構、遺物とも見つからなかった。その後の鎌倉時代には耕作地として利用されていたと考えられる。

③今回図示できなかったが、奈良時代の土坑SK 10から出土した土器及び須恵器は、平城京内で一般的に出土しているものよりも器壁が厚く、胎土に砂粒を多く含むものが多い。
(久保清子)

- 奈良市教育委員会「古市町内遺物数を地の調査」『奈良市埋文化財調査報告書 和様57年度』1983・「古市遺跡の開拓 第2次」『奈良市埋文化財調査報告書 平成7年度』1996・「古市遺跡の調査 第3・4次」『奈良市埋文化財調査報告書 平成8年度』1997
- 「古市遺跡の調査 第2次」『奈良市埋文化財調査報告書 平成7年度』1996

25. 古市遺跡の調査 第6次

調査次数 F S 第6次
 事業名 第10号（古市）市営住宅建替事業
 届出者名 奈良市長
 調査地 奈良市古市町1266-1番地他

調査期間 平成16年6月10日～7月1日
 調査面積 238m²
 調査担当者 秋山成人



今回の調査地周辺の調査には、昭和57年度に、北隣接地で古市児童館建設に伴う発掘調査（市F S第1次調査）を実施したが、遺構を検出することはできなかった。しかし、敷地の北東約150mの地点で、平成7年度に第10号（古市）市営住宅建替事業に伴う発掘調査（市F S第2次調査）を実施したところ古墳時代中期から後期の堅穴建物・樋立柱建物・井戸・土坑・溝を検出することができた。今回の調査においても、古墳時代の遺構の検出と土地の利用状況を知ることを調査目的として実施した。

調査地の地形は、北から南に下り、すでに雑壟状に宅地造成され、敷地の東半をAブロック、西半をBブロックに区画されている。調査は、Aブロック北に第1発掘区49m²、南に第2発掘区49m²、Bブロック北に第3発掘区49m²、南に第4発掘区91m²を設けて行った。

発掘区内の基本的な層序は、第1発掘区では、上から造成土、黒灰色土（耕作土）、灰色砂質土と続き地表下2.1mで、青灰色砂礫（谷又は河川堆積土）となる。第2発掘区では、上から造成土、黒灰色土（耕作土）、灰色砂質土、暗灰色粘砂と続き地表下0.8mで、青灰色砂礫（谷又は河川堆積土）となり、以下灰色粗砂（谷又は河川堆積土）、黃灰色粘砂（地山）となる。第3発掘区で、地表下約3mまで掘削したが、宅地造成時の搅乱の堆積が続く。第4発掘区では、上から造成土、黒灰色土（耕作土）、灰色砂質土、淡褐色砂質土と続き地表下1.2mで、青灰色粘土（谷又は河川堆積土）、青灰色砂礫（谷又は河川堆積土）

となる。第1発掘区・第2発掘区とも青灰色砂礫上面の標高は、84.4m。第2発掘区の青灰色砂礫の下層に堆積する黃灰色粘砂（地山）上面の標高は、82.7mである。第2発掘区の青灰色砂礫上面において、南壁から発掘区区外南へ広がる時期不明の土坑又溝を検出した。第4発掘区の青灰色砂礫上面の標高は、84.0mである。青灰色砂礫上面において7世紀後半の土器を包含する溝を検出した。

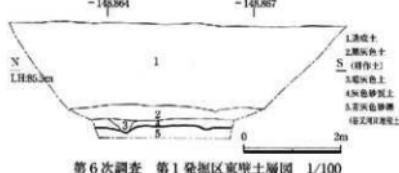
S D 01は、第4発掘区の中央を東西に延びる素掘りの溝で、長さ10.4m以上、幅0.64m、深さ0.12mである。掘形の断面形は、U字形である。埋土は褐灰色土で、7世紀後半の土器・須恵器・蓋・壺の小片が出土した。

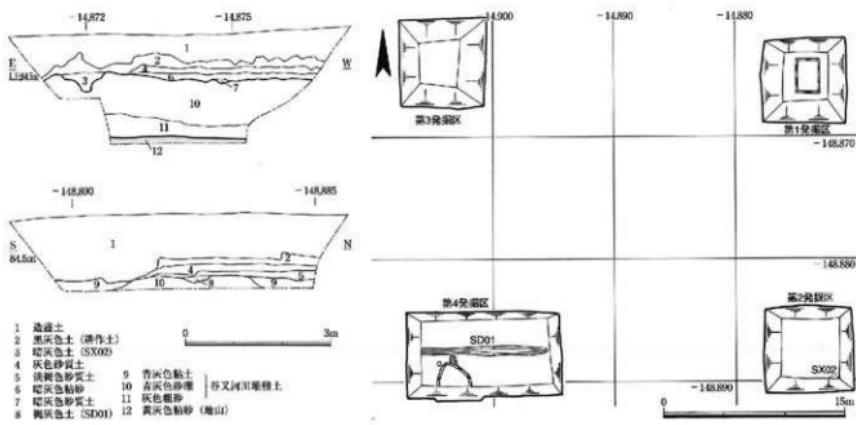
S X 02は、南壁から発掘区区外へ広がる為、詳しいことは分からぬが土坑又溝と考えられる。東西0.9m、南北不明、深さ0.4mである。掘形は、薬研掘り状である。埋土は暗灰色土で、遺物は出土しなかった。

今回の調査では、これまでの付近の調査で検出例がない7世紀後半以降の遺構が存在することが分かった。

また、調査地北東の市F S第2次調査区の黄褐色粘砂（地山）上面の標高は84.7mであり、今回の第2発掘区黄褐色粘砂（地山）上面の標高が82.7mで比較すると比高差が2mとなる。標高が低い今回の調査区内では、黄褐色粘砂（地山）上に青灰色粘土・青灰色砂礫・灰色粗砂が堆積していたが、標高の高い市F S第2次調査区では、これらの土層が堆積していなかった。

このことから、谷又河川が形成され、そこに流れ込んだ土砂が青灰色粘土・青灰色砂礫・灰色粗砂であると考えられる。青灰色粘土・青灰色砂礫・灰色粗砂から遺物が出土せず、時期は決めがたいが、青灰色砂礫上面において7世紀後半の遺物含む溝SD 01が掘られおり、少なくともこれ以前に堆積したことが分かる。（秋山成人）



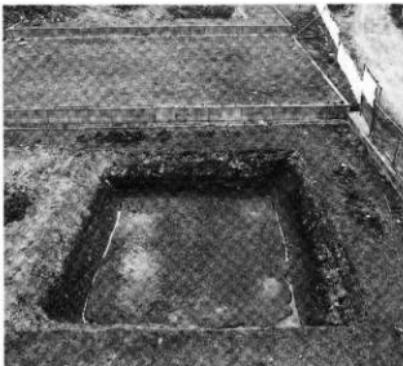


第2発掘区南壁・第4発掘区西壁上層図 1/100

遺構平面圖 1/400



第1発掘区全貌（北から）



第2発掘区全景（南から）



第3発掘区全景（北から）



第4発掘区全景（北西から）

26. 東紀寺遺跡の調査 第6次

調査次数	H K 第6次	調査期間	平成15年11月21日～12月26日
事業名	第9号市営住宅建替事業	調査面積	402m ²
通知者名	奈良市長	調査担当者	秋山成人
調査地	奈良市東紀寺町三丁目707		



第6次調査 発掘区位置図 1/6,000

I. はじめに

調査地は、春日山西側の扇状地の扇尖部で、現在の能登川北岸に位置し古墳時代の集落遺跡とされる東紀寺遺跡の南東部にある。これまでの調査には、平城京左京五条七坊十三坪の調査（市HK第243次・平成3年度）、奈良女子大学付属中学校・高等学校構内遺跡の調査（国第240次・平成4年度）、調査地に隣接して西側で、県営紀寺団地建替に係る調査（県・平成8年度、県・平成10年度）、さらに南西側で、都市基盤整備公団紀寺団地建替に係る調査（県・平成13年度）があり、古墳時代中期の古墳、古墳時代及び奈良時代の遺物を含む河川跡・土坑、中世から近世の土坑、時期不明の掘立柱建物が検出されている。調査地の南側では、第9号（紀寺）市営住宅建替事業に係る調査（市HK第5次・平成13年度）があり、古墳時代後期の掘立柱建物・溝、奈良時代から平安時代にかけての掘立柱列、平安時代以降の溝、近世の土坑を検出した。今回の調査は、これまでの調査成果をふまえ東紀寺遺跡の範囲確認と遺跡内の様相を明らかにすることを目的に調査を行った。

II. 検出遺構

発掘区の層序は、上から造成土、黒灰色砂質土、淡灰色砂質土、暗黃灰色土の順で地表下約2.0mで黄灰色土の地山に至る。地山上面の標高は、発掘区北西隅で100.1m。遺構は、黄灰色粘土の地山上面で検出した。遺構には、中世以降の粘土探掘坑、杭列の他、河川跡がある。

河川01は地山上面で検出した発掘区のほぼ全域に広がる河川跡で北東から南西方向に流れる。河川跡の北西岸は検出したが、南東岸は発掘区外に広がる。長さ11m以上、幅約30m以上、深さ1.1m以上ある。埋土は、河川の北西岸付近で、上から灰色土、暗灰色土、灰色粗砂、褐色土、赤褐色土、灰色砂が続く。発掘区の東側では、灰色土は西へわずかに下降しながら厚みを増しており、その下に暗灰色砂礫が認められる。地表下2.1mまで掘り下げたが危険を伴い掘削を断念した為、川底を確認することは出来なかった。出土遺物には、褐色土及び赤褐色土から出土した古墳時代中期の土師器・須恵器・製塙土器・木製品・部材、自然木、灰色粗砂から出土した古墳時代中期から後期の土師器・須恵器・製塙土器・暗灰色土及び灰色土から出土した古墳時代後期の土師器・須恵器・製塙土器・奈良・平安時代の土師器がある。

S X02は、河川01埋土の褐色土に打ち込まれ東西南向に長さ14.8m以上の杭列である。0.4～1.1mの間隔で9本残っており、角材・細長い板材（一辺6～8cm、長さ34～52cm）、丸木材（径6cm、長さ46cm）などがあり、建築部材を転用し先を尖らせて利用している。この杭列の南側に沿って長さ14.8m以上、幅1.0m、深さ0.12mの溝状遺構がある。埋土には灰色粗砂が堆積している。遺物は、古墳時代中期から後期の土師器・須恵器・製塙土器が出土した。

土坑群は、発掘区北西隅の河川01北西岸部の黄灰色土（地山）上面で検出した。掘形の平面は不定形である。規模は、径1.2～2.0m、深さ0.3～0.4mで、連続して掘削されており、粘土探掘坑と考えられる。埋土は暗黃灰色土で、遺物には土師器・須恵器があるが小片のため詳しい時期は分からぬ。重複関係から河川01より新しい。

III. 出土遺物

遺物整理箱に19箱分の土器、39箱分の木製品が出土。遺物の大半が河川01内堆積土の灰色土、暗灰色土、褐色土から出土したもので、古墳時代中期・後期の土師器・須恵器・製塙土器・木製品が大半である。（秋山成人）

土師器・須恵器 河川01の褐色土や赤褐色土から出土した古墳時代中期後半の土器には、田辺編年のTK

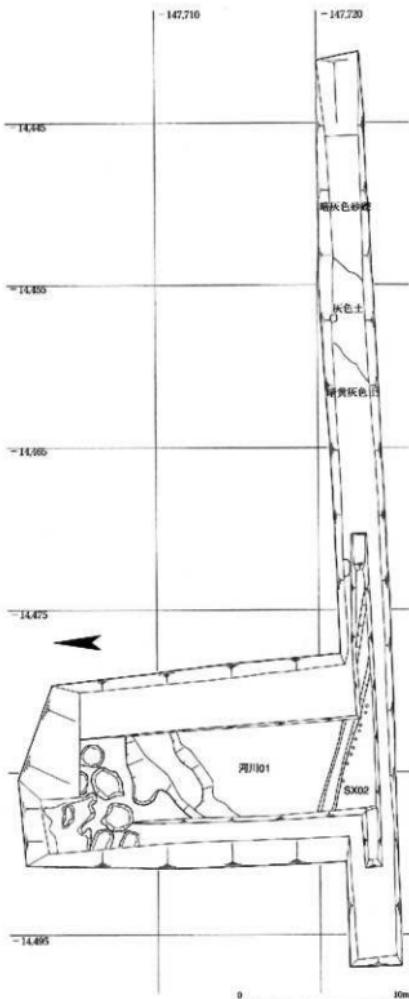
208型式及びTK23型式の様相を示す須恵器杯蓋(1・4)、杯身(2)・高杯(3・6)・器台・足(7)・壺(8)と布留式の最新段階の特徴を示すミニチュアの土師器壺(12)・壺(9・10)・高杯(13・14)・鉢(15・16)・鍋・瓶・手づくね土器(11)・製塩土器がある。須恵器壺(7)は、体部内面に煤が付着している。内部には、天然樹脂状物質が入っていた。顯微赤外分析を行った結果、琥珀(樹脂の化石)、コパール、ダンマン、ロジン(松脂)等に比較的類似したスペクトルを示した。河川01の灰色土や暗灰色土から出土した古墳時代後期後半の土器には、田辺編年TK43型式及びTK209型式の須恵器杯蓋・杯身(5)、壺がある。SX02灰色粗砂から出土した古墳時代中期末から後期初頭にかけての土器には、田辺編年TK47型式の杯身やMT15型式の杯蓋がある。(安井宣也)

製塩土器 河川01及びSX02から出土。出土破片総数403点のうち口縁部破片総数122点、総重量935.3g。大半が細片である。焼成は硬質、胎土も精緻である。これらは、形態的な特徴と製作技法によって分類できる。形態は、丸底で長胴になる筒形のもの(A)と丸底で鉢形になるもの(B)がある。さらに内外面に製作技法に違いがみられ、外面：胴部外面にタタキの痕跡が残るもの(1)、胴部外面に指押えとナデのもの(2)、内面：指押えとナデのもの(a)、貝殻の腹縁で調整した後ナデのもの(b)、ハケ目痕跡が残るもの(c)に分けることができる。以下、これらの組合せにより分類する。

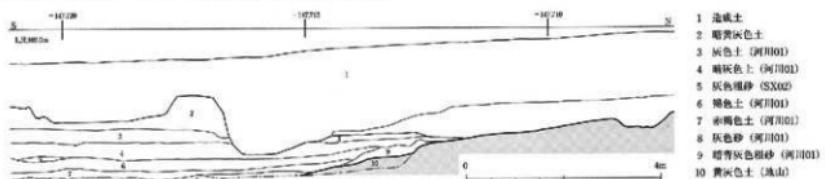
A-1 a 17~21は河川01の褐色土出土の筒形の製塩土器の体部である。製作技法は、外面横方向のタタキ、内面指押えと継ぎ目のナデ。色調は赤褐色又は茶灰色。器壁の厚さ1~3mm。出土破片数39点のうち口縁部破片数5点、重量79.2g。

A-1 b 22~23は河川01の暗灰色土出土の筒形の製塩土器の体部である。製作技法は、外面に横方向のタタキ、内面貝殻腹縁調整の後ナデ。色調は淡赤灰色。口径は口縁が残っておらず不明。器壁の厚さ2mm。出土破片数2点、重量6.4g。

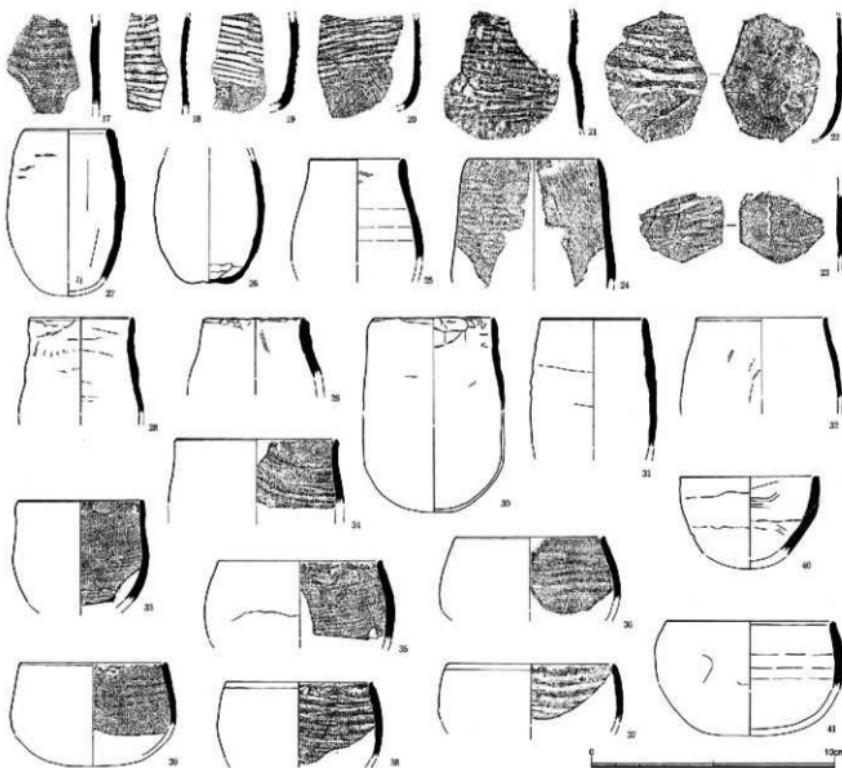
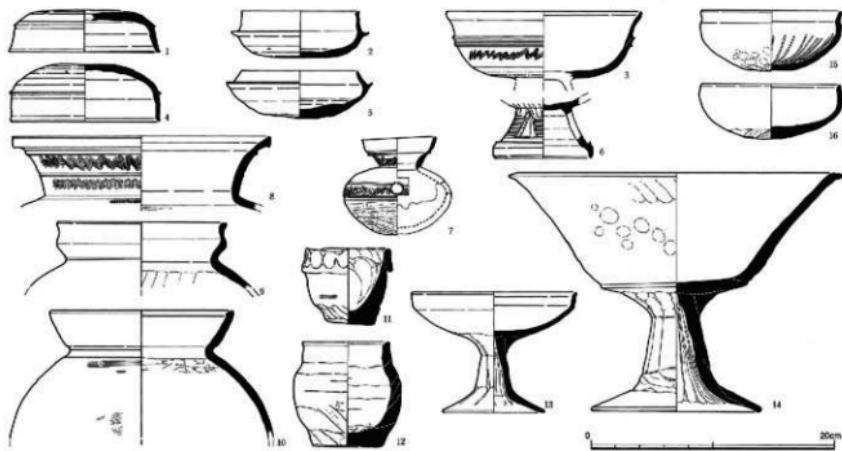
A-1 c 24は河川01の褐色土出土の筒形の製塩土器体部から口縁部である。製作技法は、外面が横方向の



第6次調査 造構平面図 1/300



第6次調査 発掘区西壁土層図 1/100



出土土器 (1~16: 1/4, 17~41: 1/8)

タタキ、内面は斜め方向のハケ。色調は淡赤褐色。器壁の厚さ0.2~0.3mm。出土破片数2点のうち口縁部破片数1点、重量8.7g

A-2-a 25~32は河川01の褐色土出土の筒形の製塙土器の体部から口縁部である。製作技法は、外面ナデ、内面ナデで、爪跡が残るものもある。色調は赤灰色。口径4~5.5cm。器壁の厚さ1.5~3mm。出土破片数267点の内口縁部破片数81点、重量6022g。

A-2-b 33・34は河川01の褐色土出土の筒形の製塙土器の体部である。製作技法は、外面ナデ、内面貝殻腹縁調整後ナデ。色調は黄白色。口径6.5cm。器壁の厚さ3mm。出土破片数4点の内口縁部破片数1点、重量5.1g

B-2-a 40・41は溝S D02灰色粗砂出土の鉢形の製塙土器の体部から口縁部である。製作技法は、内外面ともナデ、粘土紐接合痕跡が残る。40は色調が赤褐色。口径5.5cm。器壁の厚さ3.5mm。41は色調が淡黄灰色。口径7.8mm。器壁の厚さ4mm。出土破片数13点、この内口縁部破片数6点、重量45.1g

B-2-b 35~39は褐色土出土の鉢形の製塙土器体部から口縁部である。製作技法は、外面ナデ、貝殻腹縁調整を施した後ナデ。色調は黄白色。口径5~6.5cm。器壁の厚さ2~3mmである。出土破片数20点の内口縁部破片数14点、重量89.7g。

その他、褐色土及び灰色粗砂出土のA-2-b又B-2-bのものが出土破片数56点の内口縁部破片数14点ある。重量は98.9gである。

分類別出上量は、A-2-a (筒形丸底、内外面ナデ) が他に比べ多いことが分かる。東紀寺遺跡は内陸部に立地しており、海岸部から製塙土器が運び込まれたと考えられる。また、今回出土した製塙土器は、A-1-a・b・cから香川県吉田町宮兵衛島南東浜遺跡、坂出市櫃石島大浦浜遺跡などの備讃瀬戸周辺、A-2-a・b が大阪府岬町小島東遺跡などの大阪湾周辺、B-2-aが兵庫県北淡町貴賀神社遺跡、浜田遺跡など、B-2-bが和歌山市西庄遺跡などの紀淡海軒周辺で出土のものに類似する。

木製品 大半が河川01堆上の褐色土から出土した。出土総数約200点ある。木製品の種類には、農具・工具・武器・食事具・祭祀具・紡織具・雑具・部材等がある。

なお、以下で記す<...cm>の表示は、残存部の計測値を表す。

農具 曲柄平鋸 1~7 いずれも鐵製U字形刃先が装着される鋸である。柄は紐で縛るために平面が笠形をなし、笠の下のくびれから刃部へ徐々に幅広になる。1~4は刃部中央付近で最大幅となる。5は笠の下のくびれが外彎した後、屈曲して刃縁へ徐々に幅が狭くなる。1

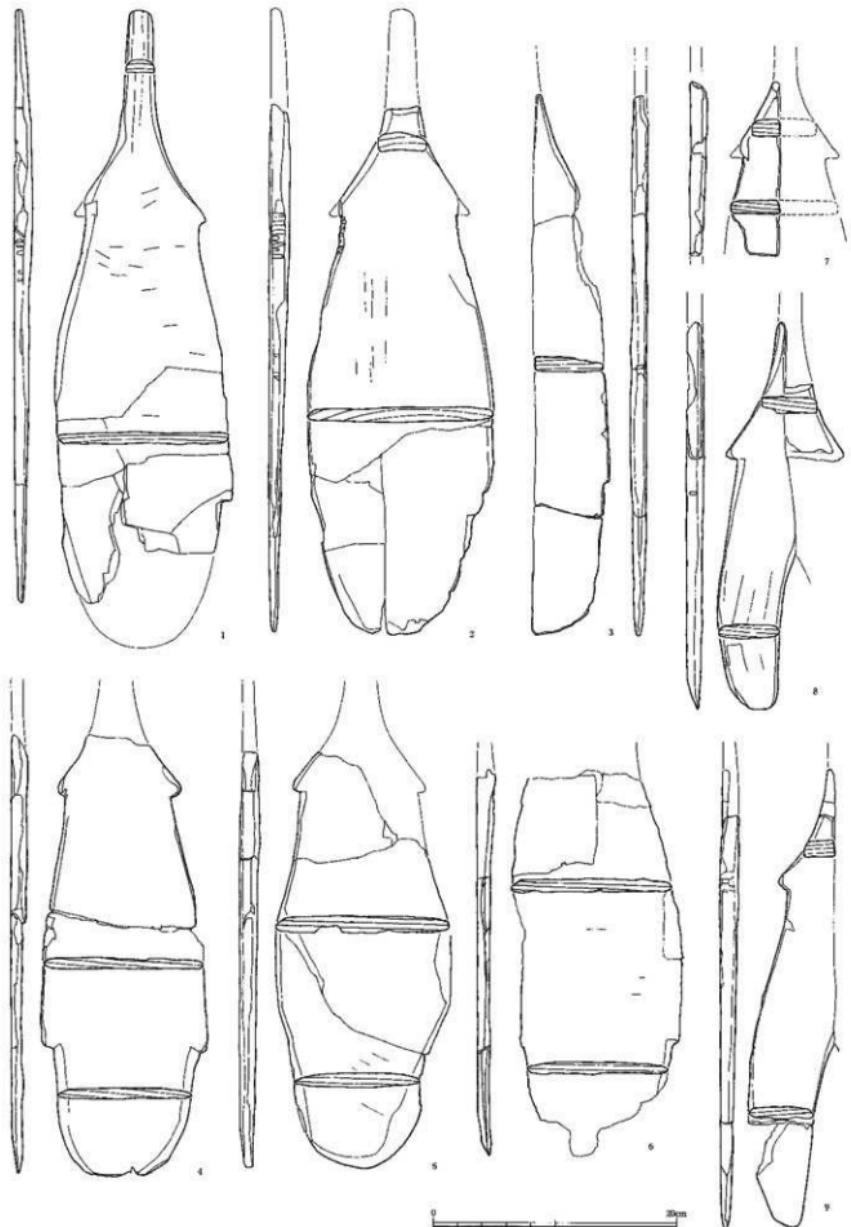
は長さ<48.4cm>、刃部長31.1cm、刃部幅14.2cm、笠幅<9.9cm>、軸部厚1.3cm。2は長さ<43.2cm>、刃部長さ<34.2cm>、刃部幅15.3cm、笠最大幅<9.8cm>、軸部厚1.7cm。3は長さ<44.1cm>、刃部長<36.2cm>、刃部幅<6.2cm>、笠幅<3.8cm>、軸部厚1.3cm。4は長さ<36.1cm>、刃部長31.9cm、刃部幅13.7cm、笠幅10.1cm、軸部厚1.3cm。5は長さ<34.3cm>、刃部長さ31.1cm、刃部幅14.4cm、笠幅6.3cm、軸部厚1.3cm。6は長さ<31.6cm>、刃部幅<13.1cm>。7は長さ<14.2cm>、刃部幅<4cm>、笠幅<3.3cm>、軸部厚1.5cm。樹種はいずれもコナラ属アカガシ亜属。

曲柄又鋸 8・9・10 紐で縛るために平面笠形をなし、笠の下のくびれから刃部へ外彎、徐々に幅広となり、刃部中央付近で二又に分かれる。8・9は刃部中央やや下で最大幅になる。二又に分かれた部分から刃縁までの長さは、刃部の長さのはば1/2である。10はくびれが外彎した後、真直ぐに細長くのびる。8は長さ<31.6cm>、刃部長20.8cm、刃部幅<6.5cm>、笠幅9.7cm、軸部厚1.3cm。9は長さ<37.5cm>、刃部長28.4cm、刃部幅<5.5cm>、笠幅4.6cm、軸部厚1.4cm。10は長さ<24.2cm>、刃部幅9.4cm。樹種はいずれもコナラ属アカガシ亜属。

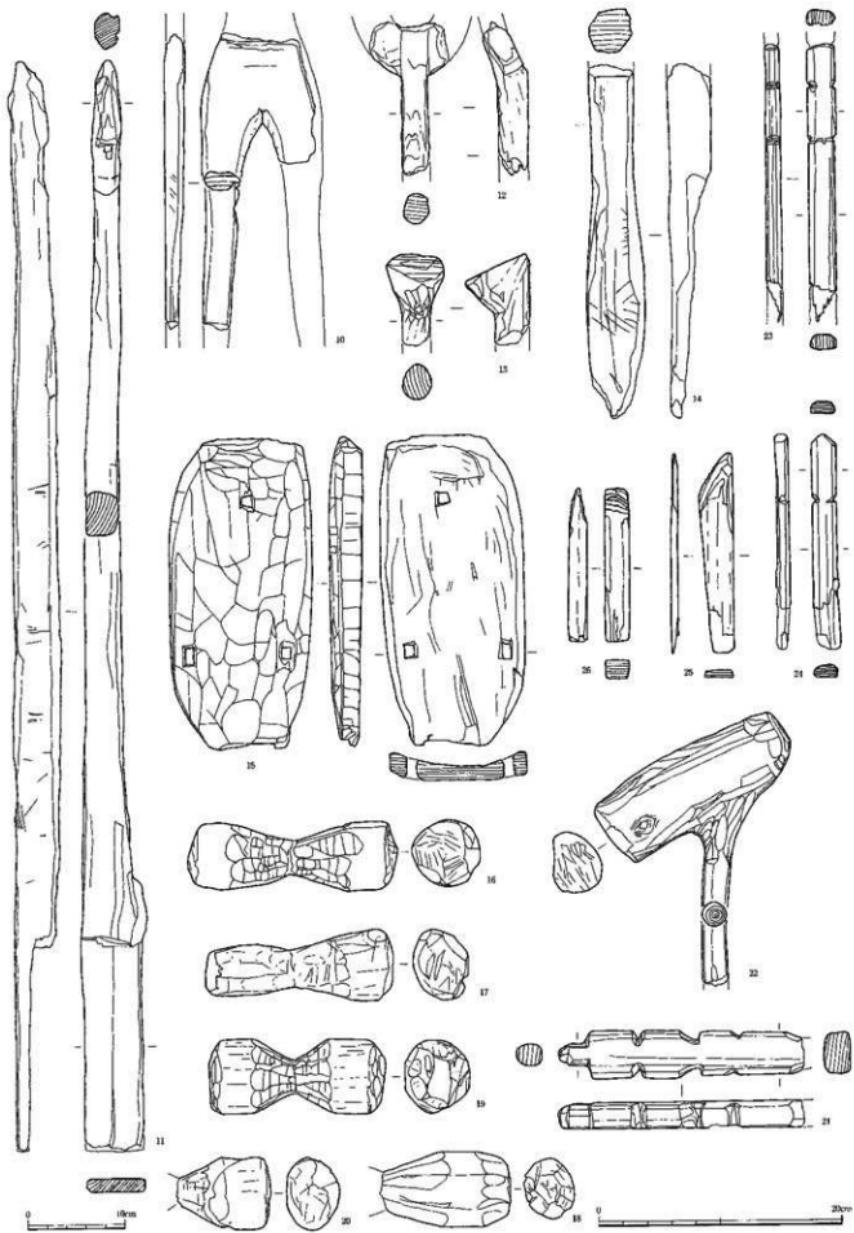
柄 11~14 11は柄の端が削り込まれ突起形をなし、両側面は先端へと方形になり、頭部先端が切り込まれ装着面をなす。12・13は柄の端に把手が付く。把手は12が逆半円形、13が「く」の字形である。14は先端から側面にかけ焼け焦げている。幅が柄の上の部分より平たくなり広がっている。12・13・14は残存状態が悪くわかりにくいが11は組合式の箇柄と思われる。12は箇柄、13は鉤又は鍾柄と思われる。14は箇柄又は漁労具の櫂の可能性もある。11は長さ<113.8cm>、切込み長<20.9cm>、切込み幅6.3cm、切込み厚1.8cm、握り中央幅3.5cm、握り中央厚4.5cm。12は長さ<12.6>cm、把手幅<4.7cm>、把手厚2.3cm、柄幅2.0cm、柄厚2.5cm。13長さ<7.5cm>、把手幅4.7cm、把手厚5.3cm、柄幅2.3cm、柄厚2.9cm。14は長さ<29cm>、柄幅3.5cm、柄厚3.5cm先端幅<4.8cm>、先端中央厚1.5cm。樹種は11がヒノキ科、12・13がコナラ属アカガシ亜属、14がスギ。

田下駄 15 縦長田下駄で、鼻緒を通した孔が3箇所ある。外縁は内彎する。削った跡が良く残る。長さ25.4cm、幅11.8cm、厚さ1.1cm。樹種はヒノキ。

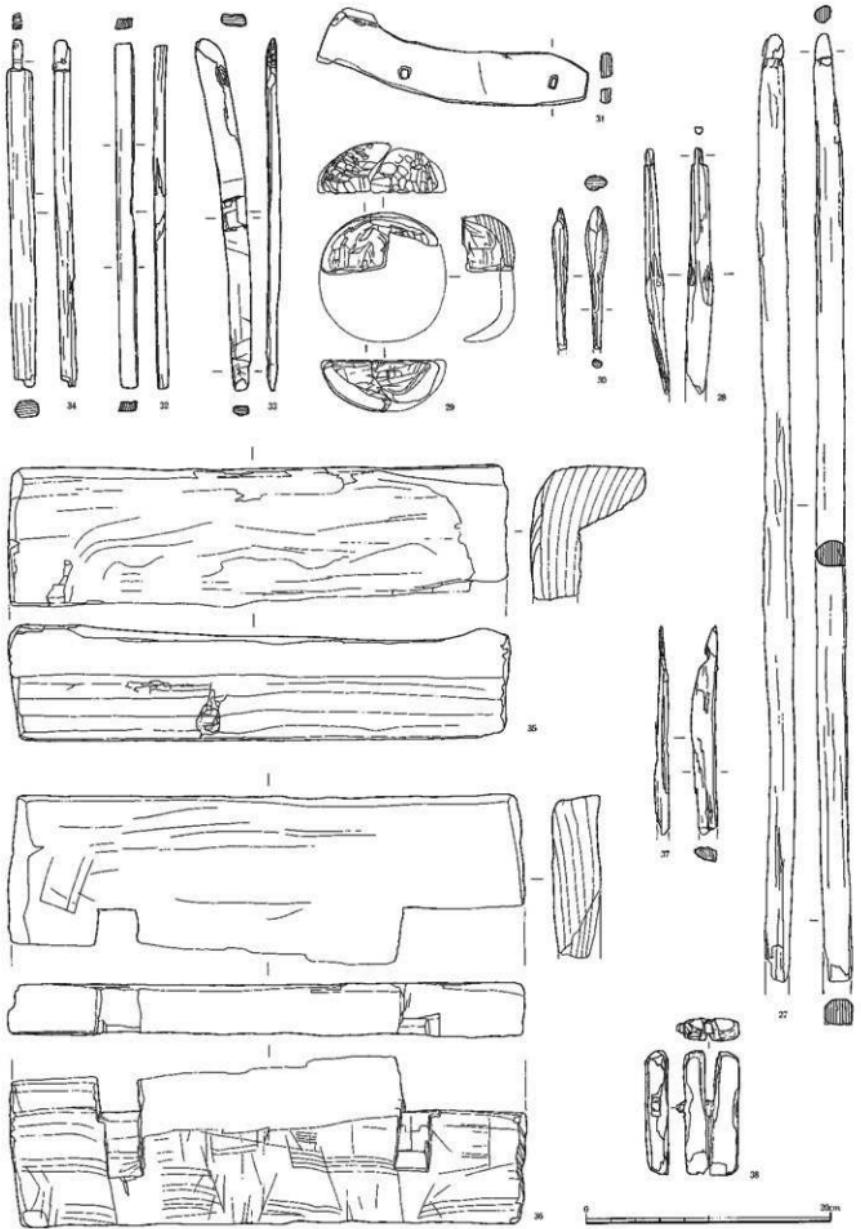
工具 木鍤 16~20 志持材を側面から中心に向けて斜めに深く削り込み、両端面も丸く削っている。16~18は、側面中央の削り込みの角度が小さく、細長い形である。19・20は、中央の削り込みの角度が大きく鼓形である。16は長さ17.2cm、径5.5cm。17は長さ15.4cm、



河川 01 出土木製品 1/4



河川 01 出土木製品 1/4 (11 のみ 1/5)



河川 01 出土木製品 1/4

径5.8×3.2cm。18は長さ<10.7cm>、径4.9cm。19は長さ14.5cm、径6.1cm。20は長さ<7.2cm>、径5.9cm。樹種は16がヤブツバキ、17がコナラ属アカガシ亜族、18がサカキ、19・20がコナラ属アカガシ亜族。

櫛台目盛板21 断面長方形で、側面角が面取りされている。両側に目盛とされるV字の切れ込みが2対ある。棒の端には枘があることから固定されたことが分かる。長さ<20cm>、幅3.9cm、厚さ2.1cm。柄は、長さ2.4cm、幅1.8cm、厚さ2.1cm。樹種はヒノキ。

斧柄22 一本で作られた膝柄の木製品で、斧台が加工されていないことから横棒とも考えられるが、着柄角度が鋭角であることから鉄斧の柄の木製品である可能性が高いと考えられる。長さ<22.9cm>、斧台長さ16.8cm、斧台径5.2cm、握り径2cm。樹種はサカキ。

武器 弓27・28 27は弓幹がほとんど彎曲せず真直ぐである。先端には、切り込まれた刃が見られる。棒槌は、刻まれていない。弓幹の一方は欠損している。28は弓幹の先端部付近が残る。先端部に、両側から切り込まれた頭がみられる。27は長さ<77.6cm>、弓幹幅2.4cm。弓幹厚2.2cm。28は長さ<20.3cm>、弓幹幅2.1cm、弓幹厚2.5cm。樹種は27がヒノキ、28カヤ。

食事具 梱29 口径<9.6cm>、高さ42cm。全体の1/2以上が欠損しているが、その大きさから杓子の可能性もある。樹種はエゴノキ属。

祭祀具 矢形30 矢尻と矢柄を一本で削り表現している。矢尻は断面楕円形で、矢柄は細く伸び、断面円形である。矢柄の一部が欠損している。長さ<11.7cm>、矢尻幅1.8cm、矢尻厚さ1.3cm、矢柄径0.8cm。樹種はヒノキ。

馬形31 板材の側面に頭、胴、尻を切り込んで表現している。胴部には脚を装着するための孔が前後に2ヶ所ある。長さ22cm、幅4.2cm、厚さ1cm。樹種はヒノキ。

刀形・刀子形25・33 25は薄い板材の先端を削って刃部を表現している。33は刀部と茎を表現している。刃部は、先端へ向かって背側に彎曲し、先端は丸くなっている。茎の先端は細く削られている。表面には直線文の線刻が見られる。25は長さ16.4cm、幅2.3cm、厚さ0.6cm。33は長さ28.7cm、幅2cm、厚さ0.9cm。茎の長さ2.4cm、幅1.3cm、厚さ0.8cm。樹種は、25・33がヒノキ。

籠織具 棒34 棒の支え木と考えられ、一方の端部には枘があり、柄に孔が穿たれている。腕木の枘孔に差込んだ際、枘と枘孔が固定され抜けないよう栓を差込んだ跡が残る。もう一方は欠損している。長さ<28.4cm>、幅2cm、厚さ1.3cm。柄の長さ2.4cm、幅0.7cm、厚さ1.3cm。樹種はヒノキ。

雑具 腰掛35・36 35は刺物腰掛で、座板と脚の1/2

が残存。平面長方形で座板上面を浅く削抜き窪んでいる。脚は長方形で座板側面から同じ長さで連がっている。36は指物腰掛の座板で、平面長方形で、脚を装着する枘孔が2ヶ所ある。枘孔は削り抜かれ、座板下面で長方形、座板上面で方形をなす。35は長さ41cm、幅11.2cm、高さ9.6cm。36は長さ42.2cm、幅<13cm>、厚さ3.9cm。樹種は35がモミ属、36がヒノキ。

その他 23・24・26・32・37・38 23・24は平面長方形、断面長方形で、側面角が面取りされ、両側にV字に切れ込みが入る。23は両端が欠損。24は片一方の先端が残っており端面は山型に削られている。26は平面長方形で、先端が両側から斜めに削られ、後端は面をなす。32はほぼ完形で、平面長方形、片側面の幅が一方の側面より広い。37は板材で片側端部近くに切込みが入り、先端が尖っている。38は方形の二つの部材を連結させるため側面に孔を穿ち、栓が差込まれている。部材の先端は丸く削られ、もう一方は欠損している。23は長さ<22.3cm>、幅2.3cm、厚さ1.3cm。24は長さ17.6cm、幅2cm、厚さ1cm。26は長さ12.6cm、幅2cm、厚さ1.5cm。32は長さ28.2cm、幅1.3cm、厚さ0.8cm。37は長さ17.2cm、幅2cm、厚さ1.2cm。38は長さ10.2cm、幅4.4cm、厚さ1.8cm、栓は、長さ4.8cm、幅1.5cm、厚さ0.8cm。樹種は23・24・26・32・37がヒノキ、38がツバラジイ(本体)、ヒノキ(栓)。

N.まとめ

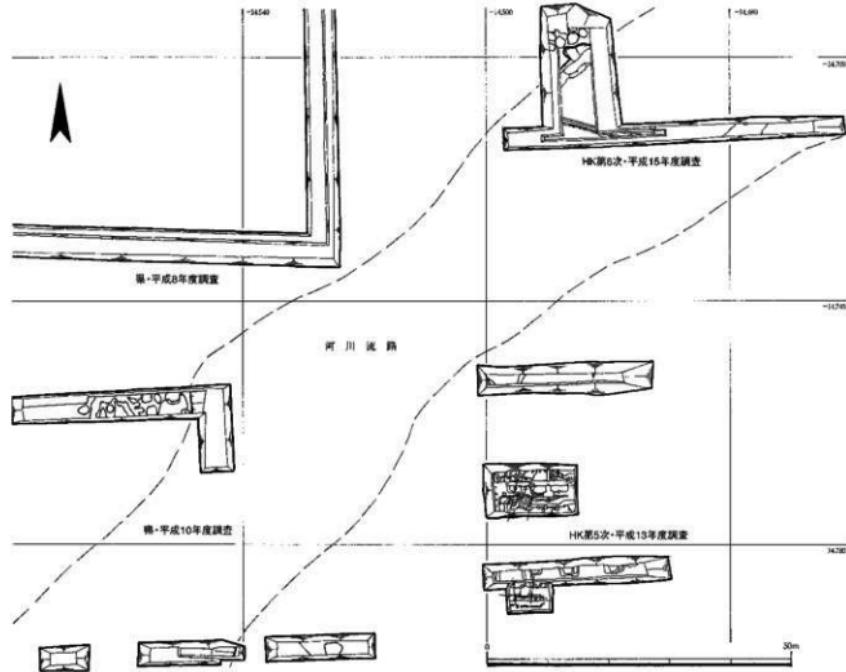
東紀寺遺跡の調査成果をまとめると次のようになる。

1 河川01は、北東から南西方向に流れ、県・平成10・13年度調査で検出した河川跡につながる可能性がある。河川の幅は約30m以上あり、現在の調査地の南側約150mを東から西に流れる能登川(幅約15m)と比較するならば、かなり広い河川であることが分かる。

2 河川01から約200点に及ぶ木製品、多くの自然木が出土した。木製品には、農具・工具・武器・食事具・祭祀具・紡織具・雑具・部材といった多種類のものがあり、古墳時代中期から後期にかけての生活用具を考える上で重要な一括資料を得ることが出来た。

3 河川01の褐色土から出土した須恵器窓内の天然樹脂状物質は分析結果によると、琥珀(樹脂の化石)、コバール、ダンマン、ロジン(松脂)に類似したものである可能性が大きいことが判明した。天然樹脂状物質は、縄文時代から装飾品以外にも各種多目的に使用され、香や緑香(蚊いぶし)として使われていたことも知られ、利用方法を考える上で貴重な資料である。

4 河川01から製塩土器がまとめて出土した。製塩土器は、形態的な特徴と製作技法により分類でき、生産遺跡の出土遺物と比較することにより、幾つかの生産



河川復元図 1/800

地から搬入したものであることが分かる。このことは、天理市布留遺跡、小路遺跡及び御所市南郷大東遺跡で発見された製塙土器の出土状況とよく似た傾向で、内部部での古墳時代中・後期の製塙土器流通を考える上で貴重な成果である。

5 今回の調査で多量の遺物が出土したことにより、古墳時代の集落が、調査地周辺で発見される可能性が大きくなつたことも成果の1つである。今後、調査成果の蓄積により集落の様相が明らかになると想える。

(秋山成人)

* 本調査の樹種同定は奈良教育大学金原正明氏、古環境研究所の結果に基づくもので、詳細は平成16年度概要報告書で報告する。
組立構造内容物に関する調査分析は奈良文化財研究所鶴子氏、佐藤川喜氏の結果に基づくもので、詳細は平成16年度概要報告書で報告する。

- 上原真人編「木器集成図解原始編」奈良国立文化財研究所史料第36号 1993
- 大川直充 真鍋昌広「大浦浜遺跡」『瀬戸大橋建設に伴う櫛塙文化財発掘調査報告V』香川県教育委員会 1988
- 櫛塙考古学研究所「南郷大東遺跡群Ⅲ」奈良県立櫛塙考古学研究所調査報告第7号 奈良県教育委員会 2003
- 木下晴一 伊藤宗宜 西辺 幸「貴船神社遺跡」「兵庫県文化財調査報告219番」兵庫県教育委員会 2001
- 小池 寛「古墳時代中期における製塙土器研究の模様と課題」「京都府埋蔵文化財情報誌第6号」財團法人京都府埋蔵文化財調査企画センター 2002
- 近藤義郎「十箇堂の研究」株式会社青木書店 1984
- 近藤義郎編「日本土器研究」株式会社青木書店 1994
- 田辺昭三「須恵器大系」角川書店 1981
- 大連参考分室「布留遺跡三島(里中) 地区発掘調査報告書」埋蔵文化財調査企画団 1995
- 天理市教育委員会「草屋・小路遺跡の調査」天理市埋蔵文化財調査報告第4号 1996
- 奈良市教育委員会「奈良市埋蔵文化財調査概要報告書平成13年度」奈良市教育委員会 2004
- 坂 譲「東紀寺遺跡」「奈良県道遺跡調査報告(第1分冊)1998年度」奈良県立埋蔵考古学研究所 1999
- 広瀬和夫「小島東遺跡」「町野遺跡群発掘調査概要」大阪府教育委員会 1978
- 兵庫県教育委員会社会教育・文化財調査「製塙遺跡I(津名郡)」「兵庫県生駒山遺跡調査報告書第2編 兵庫県教育委員会 2001
- 富加見耕作他「西中遺跡」「都市計画道路西鷹山口線道路改良工事に伴う発掘調査報告書」財團法人和歌山県文化財センター 2003
- 水野敏行「奈良東寺と東紀寺遺跡」「奈良県道遺跡調査報告(第1分冊)2001年度」奈良県立埋蔵考古学研究所 2002
- 化前元光子 高野昭弘 H野 宏「布留遺跡(西小路) 地区古墳時代の遺構と遺物」埋蔵文化財天理教調査団 1996
- 本村光保「東紀寺遺跡」「奈良県道遺跡調査報告(第1分冊)1996年度」奈良県立埋蔵考古学研究所 1997



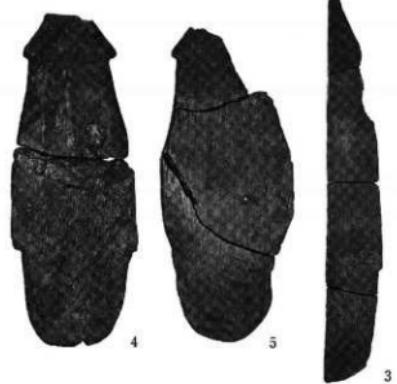
発掘区全景（西から）



河川 01 木製品出土状況（南から）



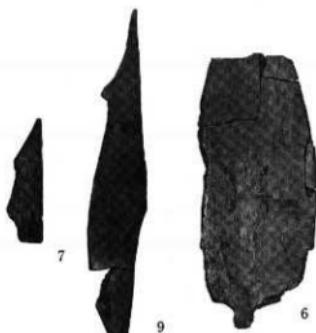
発掘区西半全景（北から）



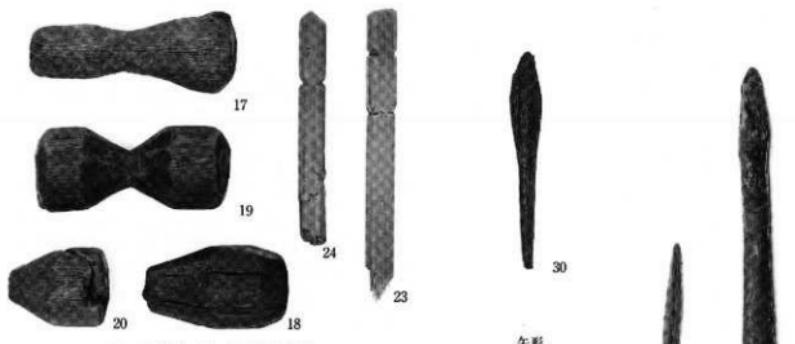
曲柄平鋸



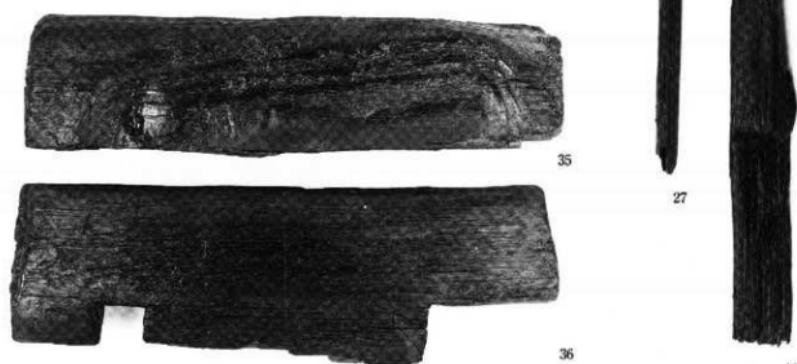
発掘区東半全景（南東から）



7曲柄平鋸又は又鋸 9曲柄平又鋸 6曲柄平鋸



矢形

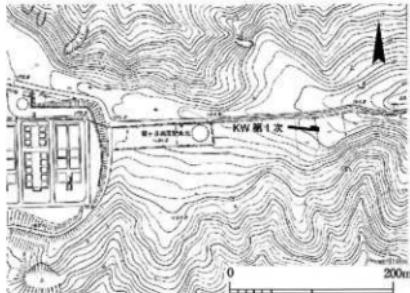


11

27. 川上町遺物散布地の調査

調査次数	KW 第1次
事業名	道路新設工事奈良阪川上線
通知者名	奈良市長
調査地	奈良市川上町897-8, 897-9

調査期間 平成16年2月2日～2月17日
 調査面積 188m²
 調査担当者 秋山成人



第1次調査 発掘区位置図 1/6,000

調査地は、奈良市と京都府相楽郡木津町との境界に接する。調査地の北側隣接地には、東西に延びる尾根上に旧街道が残っており、古くから大和と山城・近江・伊賀への要衝である。また、調査地から東へ進むと現在庵寺となっている中川寺（成身院 天永三年（1112年）建立）がある。今回の調査地は、京都府遺跡地図第5分冊によると、昭和44・45年に京都府教育委員会が行った分布調査で鎌倉時代の布目瓦が採取され「平野瓦窯跡」として掲載されているが、位置がはっきりしていない。また、史料には、「平野」がその名のとおり平らな場所で、正長元年（1473年）に山城の土一揆の集結地となり、文明十三（1486年）に平野の辻堂で中川寺の復興のための旅費が催されたことが記されている。

周辺の調査では、調査地の北約50mのところで携帯電話基地局建設に伴う発掘調査（木津町・平成9年度）が行われている。遺構は検出されず、土師器・須恵器の小片数点が出上している。また、調査地の西230mのところに鎌倉時代の土師器が採取されている奈良阪町遺物散布地が広がる。ここでは、野球場建設に伴う発掘調査（市NZ第1次・平成2年度）が行われたが、遺構は検出されず。遺物は土器の小片・サヌカイト片数点が出上している。以上のことから、瓦窯跡の有無確認及び、周辺地域の様相を明らかにするため調査を行った。

発掘区の基本的な層序は、上から暗灰色土、暗赤褐色土、黄褐色土の順で、現地表下0.2～0.4mで赤灰色粘質

土の地山に至る。発掘区西半では、黄褐色土の上に黄灰色土が約0.2m堆積している。遺構は、地山上面で検出した。遺構検出面の標高は、発掘区東半で189.75m、発掘区西半で187.25m、東から西へ下降する。

検出遺構には、時期不明の掘立柱列、土坑がある。

SA01は、発掘区中央東よりで検出した南北1間の柱列で、柱間寸法は3.3mである。柱穴は、平面楕円形掘形で、地山から垂直に掘り込まれ、柱抜取り痕跡を残す。規模は、長径0.95～1.1m、短径0.76～0.9m、深さ0.6～0.76mである。これに続く北または南に延びる柱穴は検出されなかったことから建物にはならない。遺物が出土せず、時期は不明である。

SK02は、発掘区東半で検出した平面不整形掘形の土坑で、ほぼ垂直に掘り込まれ、底は平らである。規模は、長径0.9m、短径0.66m、深さ0.65mである。埋土は黄褐色土で、遺物が出土せず、時期は不明である。

SK03は、発掘区南壁沿いで検出した発掘区外南へ広がる平面不定形掘形の土坑で、掘形の断面形はU字形である。規模は、東西2.9m、南北2.0m以上、深さ0.8mである。埋土は黄褐色土で、遺物が出土せず時期は不明である。

SK04～07は、発掘区東半で東西方向に並ぶ平面不整形掘形の土坑がある。ほぼ一列に並ぶものの、底は浅く起伏があり均一でなく、柱抜取り痕跡もないことから掘立柱列と考えにくい。規模は、SK04・06・07で、長径1.2～1.35m、短径0.7～0.85m、深さ0.25～0.36m、SK05で長径2.1m、短径0.9m、深さ0.30mである。埋土は黄褐色土である。遺物が出土せず時期は不明である。

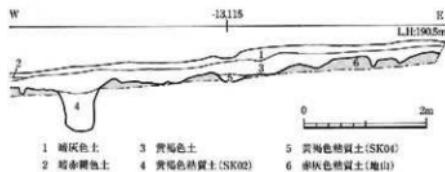
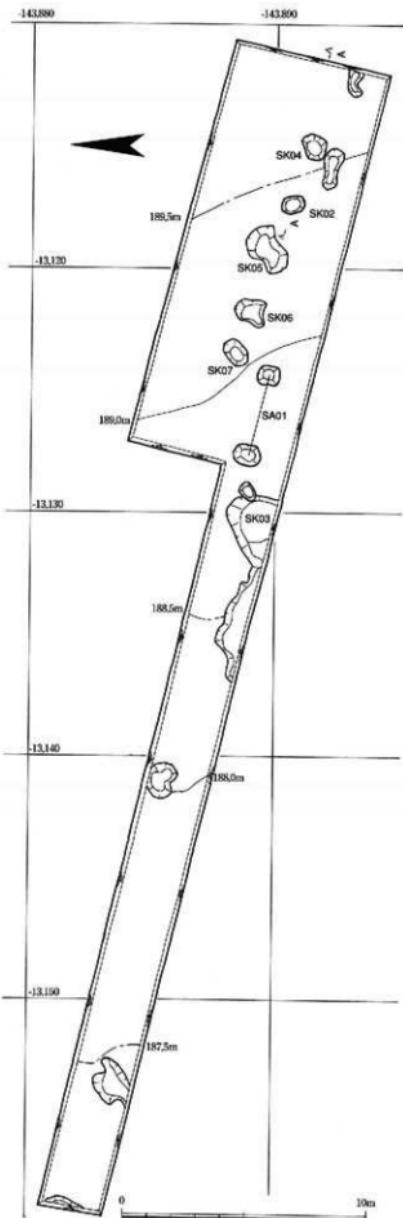
調査の結果、掘立柱列を検出したことで、瓦窯、または、辻堂に関係する建物等の可能性が考えられる。しかしながら、瓦や土器等の遺物が出土していないことから、明確に判断するに至らなかった。 （秋山成人）

1) 『京都府遺跡地図 第5分冊』京都府教育委員会 1989

2) 『奈良市史 通史2』奈良市 1994

3) 『平野瓦窯跡発掘調査報告書』木津町教育委員会 1998

4) 『奈良市埋文化財調査報告 平成2年度』奈良市教育委員会



A ライン土層図 1/80

奈良市埋蔵文化財調査概要報告書

平成15年度

平成18年3月29日 印刷

平成18年3月30日 発行

編集 文化財課 埋蔵文化財調査センター
(奈良市大安寺西二丁目281番地)
(電話番号:0742-33-1821)

発行 奈良市教育委員会
(奈良市三条大路南1丁目1番1号)

印刷 株式会社 明新社
(奈良市南京終町3丁目464番地)
